あやかしとかりうど

怠惰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あやかしとかりうど

【Ｎコード】
Ｎ６４４２Ｃ

【作者名】
怠惰

【あらすじ】
ここではないけれど、ここに似たどこか。動物を狩りながらあてもない旅を続ける若者がいた。冬を目前にして獲物の数がめっきり減り困っていた時、立ち寄った村で彼は一つの相談を受ける。和風の世界で起きた、妖と人の一つの冬の話。

一、けものとかりうど

背の低い木々と膝丈程までの草が茫々と茂る森の中、細い木々を鉈で払い掻き分けながら進んでいく若い男の姿がある。
彼の名は雁谷貴実（かりやたかさね）。齢十六、成人してまだ幾許（いくばく）もないこともあってか、どこか顔立ちに幼さが残っている。

彼はこの地より数十里東の地に生を受け、十五となり世間に一人前と認められるまでをそこで過ごした。
そして成人から十日の後、彼は僅かな路銀を持って故郷を出て、何処を目指すでもない放浪の旅の中に生きるようになる。
幼少の頃から有事の際には、と地道に貯め込んでいた小遣いは旅の生活の中で半年と経つ前に使い果たしてしまったが、持ち前の狩りの腕を活かし、兎や鹿などを時折捕まえては立ち寄った村で金や食料、衣類と交換して過ごす、明日は分からぬまでも特に問題無い生活を送っていた。

そうして一年が過ぎ、冬が近付くにつれて減っていく獲物に彼が旅を始めて以来最大の危機感を抱き始めた頃、雉や鴨を冬物の服と交換しようと訪れた山間の村でその村の長から相談を持ち掛けられた。
その内容は、近頃近隣の森で暴れている巨大な猪を退治して欲しい、というもの。
その猪は元はこの山一帯のヌシであり、口元から一本だけ覗く珊瑚の如く白く美しい牙から人々に『一本牙』と呼ばれ、その巨躯は

成人した男二人が腕を広げた程もあるという。
今の所村人たちに被害は出ていないものの、これから寒くなるにつれて森の中の食料は減る為、腹を空かせて村に降りて来るかもしれない。その前になんとかしてほしいという話であった。
彼はそれを聞いて最初は頑なに断り続けたのだが、村人たちの必死の説得と報酬として冬を越すまでの住処や食事などを用意するという話に、最後はとうとう折れることとなった。

森の中は確かに荒れていた。所々にへし折られた細い木々が転がり、枯れかけた草の生い茂る地面には大きな窪みがいくつも出来ていた。土中の餌を求めて掘り返したのだろうが、それにしても数が多い。
まず初め、彼は痕跡の多く残っていた泥沼の付近に大小様々な罠を仕掛けた。
村人たちの話に拠ればその猪は大層な巨体であるらしいが、実際は話に尾鰭がついただけで他より少し体格が立派な程度だろうと思ったのである。
落とし穴に始まり虎挟みや鋼線を使った足括りの罠まで一通り仕掛け終えると、彼は村に戻った。
だが村の長に仕掛けた罠の種類について話すと、長は微妙な顔をしてそれではおそらく無理でしょう、とだけ言った。

次の日、果たしてそうなった。
仕掛けた罠の全てが完膚無きまでに壊されていたのだ。

貴実はその後も何度か同じような罠を仕掛けたものの、結果は変わらなかった。
背の丈程の深さがある落とし穴はあっさり抜けられ、虎挟みは鎖を引きちぎられ、足括りの罠は結び付けていた木をへし折られた。
これは確かに並の事ではなさそうだと思えたが、一つだけどうにも不可解なことがあった。
何故かその猪は、その大小に関わらず仕掛けた罠の全てに掛かるのである。
猪の通った痕跡のある周辺に仕掛けたとはいえ、それは流石に異様としか言えまい。
その理由が気になるところであったが、今回はそれを逆手に取った。
猪の肉は貴重であり、物品交換の際に有利な取引ができるので、今までの罠は全て肉を痛めない捕獲用のものであった。
しかしこのままでは埒が開かない。そこで昨日、それらの中に一つだけ致死性の高い罠を仕掛けた。
二本の木の間に張った鋼線に何かが触れると、大量の刺を生やした巨木が振り子のようにして勢いよく落とされる、本来は狩りではなく戦で使われるような代物である。
普段使い慣れないものの為に準備に時間が掛かり、今までの半分程の罠しか仕掛けられなかったが出来栄えはなかなかのものであった。

そして今日の昼過ぎ、罠の様子を見に来たところ、どうやら策は見事成ったようであった。
木の上に不安定な状態で固定してあった刺木の錘は吊られた状態で風に僅かに揺れ、肘の先ほどもあろうかという表面の刺にはべっとりと生乾きの血が付着していた。

しかし、問題の猪の姿が無い。そこには大量の血痕と破壊された数々の罠しか残されていなかった。
出血の量からすると決して軽傷で済むようなものとは思えないのだが、死に際の力を振り絞ったのか、そこから離れていくように血の跡が続いていた。
骸を確認してその証明になるものを持ち帰らねばならないため、貴実は草木を掻き分けその跡を辿っていったのだった。

※※※※※※※※※※

「……おかしい」

誰にとも無く呟く。この状況は明らかに異常である。
罠の場所から歩き出してもうどれほどの時間が経ったか。秋の空気も暖まった体を冷ますには至らず、背中からは濛々と湯気があがっている。
血の跡は森の先、山の上へと未だに続く。いくらなんでもここまで頑丈な動物など聞いたこともない。普通ならあの場で死んでいておかしくないような出血の量だというのに、どういうことだ。
際限なく膨らむ疑問を抱きつつ先へと進んでいくと、突如開けた

場所に出た。
地面も今までのような軟らかな土でなく、ごつごつとした岩のものに変わる。僅かに苔が生えるばかりで、草の一本もない。
そして、その先には倒れ伏す一匹の獣がいた。

「な……」

遠近感が狂ったような規格外の巨体に、口元に一つ光る巨大な牙。左の脇腹から前脚にかけての部分がずたずたになっていて、血がとめどなく流れている。
凄まじい威圧感。それは正に、ヌシとしての風格とでもいうべきものか――

「！！」

一瞬、呼吸が止まる。
一本牙がこちらを見た。ただ、それだけのことで。
巨躯が蠢く。両の前脚を踏ん張り、力を漲らせる。
――あの傷で、起き上がろうというのか。私を討とうというのか。
左脚が折れた。鼻先が地を擦り、血飛沫が岩を染める。
だが、一本牙は再び左脚を突き立て、起き上がらんと身を震わせる。
呆然とその姿を見る私の目が、一本牙の瞳を捉えた。……汚れのない瞳であった。

「……ああ、そうなのか」

理解が私の心を満たした。何故、戦うのか。何故、私に立ち向かうのか。
私への恨みではない。ただの本能でもない。この一匹の獣は、納得を求めている。
ヌシを務める者は義務として、次のヌシを選ばねばならない。私にそのヌシとしての器があるのか、それを試そうとしているのだ。
そのためにこの獣は死にゆく体に鞭を入れ、私と戦おうとしている。
今、ついにその身を起こした一本牙は何かを窺うようにこちらをじっと見つめている。

――準備は、いいのか？

そんな声が聞こえたような気がして、ふと笑みを浮かべる。
右手の鉈を握り直す。背負った荷を放り投げ、一本牙の正面に立つ。

「ああ、来い。主の命と、ヌシの座、共にこの私が受け継ごう」

意志を込めて言い放つ。
一本牙はそれに轟、という叫びで応え、後ろ脚を何度も蹴り上げて岩の破片を撒き散らす。
逃げ道などもはや何処にも無い。いや、そもそも逃げる気は毛頭なかった。
二度目の咆哮。躍るように飛び出した巨獣と同時に駆け出す。
激突の寸前、大きく振り上げた右手を眼前の剛毛に覆われた頭部へと、

「っおおおおおお――――――！！」

叩き付けた。

※※※※※※※※※※

持ち帰った掌ほどもあろうかという巨大な牙を見せると、長は大いに喜んで私に労いと感謝の言葉を驟雨（しゅうう）の如くかけた上で、山ほどの食料や衣類などを与えた。

その上、村の中央にある長の家……この村で最も立派な屋敷だ……で冬の間を過ごすよう勧めてきたが、私はその申し出を断って今まで使っていた村外れの森の中にある空き家を引き続いて借りることにした。

この村にいつまでも留まる気はないし、面倒な人間関係を作りたくない。それに人の輪の中にいると一本牙を狩った時についての話ばかり聞かれ、嫌になるのだった。

獣とはいえ、殺しの話をさも手柄のように話すのは、しかも罠で弱ったところを仕留めたというのは罪悪感しか感じられない。

他の命を奪うことに忌避を感じるわけではない。だが、それを誇るわけでもないのだ。

それに、あの戦いは単なる猛獣退治のような人に言って聞かせる

ことに意味のある武勇伝ではない。それ自体が意味を持つ、大切な戦いだった。

「……まあ、それだけでもないのだがな」

私は人の傍で暮らすことは出来ない。だが、人から離れて生きることも出来ない。

獣として生きていくには、人として生きてきた時間が長すぎた。一人では生きられても、独りでは生きられない。

ふと、周囲を見回す。夕日に赤く染まり始めた世界の中、好奇心に満ちたいくつかの視線がこちらを向いていた。

早いうちに去ろう。そう思い、できるだけ視線の無い方を選びながら家を目指した。

森の中の小道を歩く。日は既に半分以上が沈み、少し膨らんだ半月が西の空の雲の隙間から朧に見てとれる。

腰の後ろの帯には使い古した鉈が挿されている。

あの時、一本牙の眉間に鉈の刃が突き立った時、その体格に較べて小さな瞳は何を写していたのだろうか。

新たなヌシになるなどと大言壮語を吐いたものの、私に何が出来るというのか。この山にいつまでもいられる訳でもないくせに、ケモノとして生きる強さも無いくせに。

そもそも、私は狩人だ。獣にとっては敵以外の何物でもない。ヌシ以前に、山に住む者の一員としてすら認められないのではないか。

ぼんやりと思考を重ねていると、不意に傍らの草むらが揺れ、何かが飛び出してきた。

それは私が反応するより先に背後へと回り、すかさず背負っていた荷へと飛び付いて鹿の干し肉を一切れ奪い取ると、現れた時と同じように素早く茂みの中へと飛び込んだ。

俊敏な動きと夕闇ではっきりとは見えなかったが、どうやら子狐のようであった。食料が無くなって山から麓まで降りてきた口だろうか。
干し肉一切れ失った所で特に思うところはないが、その子狐が少々気になったので跡を追ってみることにした。

子狐は思ったよりも足が速く、身体の小さいこともあって追うのには難儀したが、それでも今の所はなんとか見失う事なくついてこれている。
というのも、別に私が特殊な技術や能力を持っているわけではなく、ひとえにその子狐が真っ直ぐに走り続けているためである。
追跡を蒔くのならもっと不規則に曲がりながら走るなり木に登るなりいくらでも手立てはあるだろうに、何故かそのようなことをしないのである。
それどころか、その子狐は振り返ることもせず獲物をくわえてただひたすらに走ることに専念しているようにすら見える。
――どこかを目指しているのだろうか。そのようにしか思えない動きであった。

日が更に沈み、空の色が赤から黒へと変わろうという頃になってようやく子狐はその足を緩めた。
僅かに距離を置いて様子をみていると、子狐は朽ちかけた倒木のうろの中に姿を消した。
それからしばらく倒木を眺めていたものの、出て来る気配は無い。
この場所を目指していたのだろうかと思うと暗いうろの中の様子が気になり、気配を殺しつつそこへそっと近寄る。
倒木の横に立つと、中から僅かに鳴き声が漏れてくるのが聞こえた。それも、一匹のものではない。
意を決して中を覗き込む。最初は闇がただ広がっているようにし

か見えなかったが、目を凝らすとうっすらと様子が見えてきた。
中には二匹の子狐。一つの干し肉に両端から互いに食いついているのだが、片方が妙に弱々しい。
肉に何度も噛み付いて喰いちぎろうとしているのだがどうにも噛み切ることが出来ないでいるのだ。
それでもしばらくは続けていたのだが、とうとう諦めたのか、一口も食べないまま口を離して力無く伏せってしまう。
その様子を見たもう一匹の子狐はきゅう、と心細げに鳴いてその顔を嘗める。僅かに身じろぐものの、それでも顔を上げることはない。
どうも大分弱っているようだと思った所で、その子狐の下半身が穴に嵌まっていることに気付いた。
この倒木で遊んでいたらうっかり嵌まって抜け出せなくなったのだろう。抜け出そうと暴れたのか背の辺りの毛が木に擦れて黒く汚れている。
と、もう一匹の子狐が私に気付き、毛を逆立てながら低い唸り声を上げて威嚇をし始めた。
この子狐は木に嵌まって動けなくなった仲間を見捨てられず、ずっとさっきのように食べ物を運んでいたのだろう。
だが、一月前ならまだしも今の時期に森の中で得られる食べ物の量などたかが知れている。このままでは二人して共倒れになる危険もある。

それでもこの子狐は諦めずに、こうして必死に守ろうとしている。食べ物を得るために危険な人里近くに降りてまで。

「凄いな、お主は」

こうしてこの場に出くわしたのも何かの縁だ、出来る限りの事はしてやろう。

こちらを睨み付ける子狐は一先ずおいておき、倒木の裏側に回る。
葉の先が茶色く枯れかけた雑草を掻き分けると、だらんと足の伸ばされた狐の下半身が穴から生えていた。
先程うろの中から見えた部分と合わせて考えると、木の厚みは指三本分といった所か。これならなんとかならないでもない。
腰の後ろに固定していた鉈を抜く。誤って体を傷付けないよう気を付けつつ、穴の上辺りに鉈を振るう。
硬い音を立て刃が食い込む。振動が伝わって尻尾がびく、と震えたが、またすぐに力を失って地に落ちた。
足をかけて鉈を引き抜き、もう一度斬り付けようと振りかぶったところで左足に鋭い痛みが走る。

「――〜〜〜〜っ！」

見ると、服の上から左のふくらはぎに子狐が食らい付き、爪を立てていた。
この子狐に私が何か危害を加えるものと思い攻撃してきたのだろう。
反射的に蹴り飛ばしてしまいそうになったが、そうしたところでまた何度でも襲い掛かってくるだろう。
覚悟を決め、再び鉈を振り下ろす。
二度、三度と繰り返すうち、ふくらはぎに食い込んだ小さな牙はますますその力を強くし、爪はがりがりと足首から膝にかけてを何度も引っ掻いた。
それでも鉈を振り続けると、十何回目かにしてようやく刃先が木を貫く感触を得た。
そこから慎重に亀裂を拡げていき、子狐の嵌まった穴の少し上に手首から先程度の長さの亀裂を入れた。

「さて、これでどうか……」

無事な右足を持ち上げ、出来た亀裂の横を力一杯踵で蹴りつける。倒木が軋みをあげ、また僅かに裂けるような音がした。
更に蹴ると、今度は確実に木の砕けた音が響く。亀裂が穴にまで達し、尾がぴくんと揺れた。
左足に噛み付いた子狐は今や狂ったように暴れ、まるで膝から下を食いちぎろうとするかのように首を振り牙を立てる。
慎重に狙いをつけ、最後に穴の真上を爪先で蹴り上げる。すると乾いた音と共に亀裂の部分が大きく砕け、見えなかった子狐の背の部分が目の前に晒された。
その体を抱き上げる。殆ど抵抗を返さない体はやけに軽く、ひどく衰弱しているのが分かった。
左足に噛み付く子狐の側にその体を下ろす。必死に私に立ち向かおうという様子だったのが、もう一匹の姿に気付いてふと顎の力を緩めた。
左足を持ち上げ振り払うと、子狐は先ほどまでの抵抗が嘘のようにあっさりと体を離した。
口元を赤く染めた子狐がもう一匹に近寄りくぅん、と鳴くと、痩せた子狐は上体だけを起こしてその頬をぺろりと嘗めた。

「ふぅ……」

その様子を眺めつつ、倒木に腰掛けて傷の治療をする。血は派手に流れているが、筋肉や筋は痛めていないようだ。この分なら数日で痛みも引くだろう。
包帯を取り出して止血し、傷口を巻いていく。走るのは難しいだろうが、歩く分には問題ない。
と、子狐の片割れがててと駆けてきて私の座るすぐ横に飛び乗り、じっと顔を見つめてきた。

何となく手を差し出してみると、子狐はその指先をぺろぺろと嘗めた。礼を言っているのだろうか。そのまま頭を撫でてみたが、大人しくされるがままである。

荷を探り、生の鶏や野兎などいくつか食べやすそうな食料を取り出して目の前に置く。最初はそれと私とをきょろきょろと交互に見比べていたが、ぽんと頭を叩いてやると素直にそれをくわえて持って行った。

今度はちゃんと食べることが出来ているのを確認すると、荷の口を締め直して立ち上がる。日は既に落ち、頼りない月明かりだけが森の中を照らしている。

背を向けて歩き出した所で、けん、と二つの鳴き声が上がった。

振り返らずに手を振って返し、その場を離れた。

※※※※※※※※※※

夕餉に使った食器を家の横を流れる小川で洗う。マツムシの音色が秋の終わりの冷えた空気の中で静かに響いている。

借り受けた家は外見こそ少々荒れた様子だったが、内側は気になるほどのものではなかった。

最後に住んでいた者がいなくなってから今まで数年の間放置されていたとのことだったが、囲炉裏や三和土には最近何度か人が使っ

た跡があった。
恐らくはこの近くを通った旅人が一夜を過ごすのに使ったのだろう。多少ぼろでも雨露はしのげるし、村からは少し離れた場所にあるので勝手に使った所で文句を言われることもない。
とはいえ、所々壁や天井に大きな損傷が見られる。これからの季節、雨漏りや隙間風が吹き込んでくる家というのは住むのに少々辛いものがある。
数日を過ごす程度ならまだしも、本格的にここで暮らす事を考えれば補修は絶対に必要となる。
となると、明日の朝にでもまた村に行きいくつか道具を借りなければならない。夕方、自分に向けられた視線を思い出し溜め息を吐いた。

水を汲んだ瓶と重ねた食器をそれぞれの手で持ち家へ戻る。
畳の上に適当に置き、力を込めればがたがたと音を立てながらも辛うじて動く戸を閉める。
瓶から器に半分ほど水を注ぐと草履を脱いで居間へ上がり、荷から小さな袋と鉈を取り出す。
それを持って再び土間へと戻り、鉈を器の水で洗う。それから袋の口紐を解いて砥石を取り出した。
水に浸けてから刃に軽く当て、少し角度をつけながら引く。紙を裂くような軽い音が家の中に響いた。
燃え上がる油にぼんやりと金属質の鈍い光を返す鉈を見つめながら、黙々と繰り返す。
今日は一日、随分と活躍させたものだ。
普段のように枝を払い、戦いの武器として使い、厚い木を叩き割った。形の変わらないただの鉄の塊も使い方によって自在にその在り方を変える。
道を作り、敵を倒し、命を救う。ただ切るだけの道具が異なる状況下ではそれぞれ様々な結果を生む。

自分はどうだろう。在り方はあの日、家を出てから大きく変わった。すべてを捨て、野に生きるようになった。

では、その姿は。大分体は成長したと思うが、それだけではない。もっと大きく致命的な変化が起きてはいないか。

満月の下、天に吠える獣の姿が頭を過ぎった。いつか自分もこの旅の中でそのようになるのではないだろうか。鉈は牙になり、草履は鋭い爪を持つ四肢へと変わり、最期には人としての魂をも失って――

瓶から直接鉈に水を掛け、濁った水を洗い流す。明かりの下で刃の具合を確かめてから布で拭い、鞘へと戻した。

一仕事終えた所で急に眠気に襲われ、大きく欠伸をつく。思えば今日は大変な一日だった。まだ少しやることがあるが、それはまた明日に回して眠ることにしよう。

部屋の隅に引いた布団に潜り込み、荷と鉈を枕元に引き寄せた上で明かりを落とす。なんせそこらに穴があいているのだ、獣が潜り込んでくる危険がある。

微かに清流と虫の音を聞きながら、意識は急速に闇に包まれていった。

突然目が覚めた。原因の分からない緊張感に体が強張る。

すぐに布団を跳ね退け、荷を引き寄せた。鉈を納めた鞘の硬い感触が今は心強く感じられる。

こういうことは今まで旅の中でも何度かあった。狼や蛇の気配だったり、地滑りの前兆だったりと原因は様々だったが、どれも身に迫る危険に反応してのものだった。

頭を冷静にして耳を澄ます。すると、微かにだが犬が吠えているのが聞こえた。
時が経つにつれてそれは段々と鮮明に聞こえるようになる。だが、それは野犬たちがこちらへと近付いてきていることを示している。声の間隔からして四頭前後の小さな群のようだ。
鳴き声と足音は更に大きくなる。思わず鉈を握る手に力が入り、額に薄く汗が浮かんだ。
そして足音はこちらへと向かって一直線に近づき、だがとうとう覚悟を決めて鉈を抜こうという所で動きが止まった。
依然ぎゃんぎゃんと野犬の吠える音は衰えることなく聞こえるのだが、足音がぱったり途切れ聞こえなくなったのである。
何があったのか分からないがこちらにとっては好都合。火口箱から火種を取り出し、油に火を点ける。その僅かな明かりを頼りに荷をひっくり返してあるものを探す。
小さな桐の箱を取り上げると、その蓋を開けて中からいくつか穴の開いた握りこぶし大の独楽の形をした木片を取り出し、麻の紐を軸の部分の穴に通してしっかりと結び付けた。
強く引っ張っても解けない事を確認すると、右手に鉈を、左手にその木片を掴んで外に出た。

月明かりに照らされ、川の側の一本の木の周りを野犬の群が囲み、樹上に向かって吠えている様子が見える。
そこに何がいるのかは陰に隠れて見えなかったが、この犬達に追われて逃げて来たのだろうということは想像できた。
別にこの野犬が何を襲おうと興味は無いし、犬全般に対して何かしらの私怨があるわけでもない。だが、それを襲っただけで満足して森に帰っていくという保証はない以上、身に危険が及ぶ前に追い払うべきであろう。
左手の木片に括りつけた紐を持ち、くるりと頭上で一回転させる。すると、先端の木片が低く唸るような音を奏でる。

その音が月夜に響いた瞬間、喧しく吠え続けていた野犬たちはぴくりとその動きを止めてこちらに顔を向けた。
それを確認し、今度は一回転と言わず肩から先を使って勢いよく何度も振り回す。
おんおんおん、と腹の底を震わせるような音が連続して響くと、野犬たちはおろおろと慌てふためいた様子で木の側を行ったり来たりし始めたが、とうとう背中を向けて逃げ出していった。

これは数月前にとある村に立ち寄った際に他の旅人から譲り受けたもので、こうして風を送ると獣達の恐れを呼び起こす音を奏でるのだという。
なんでも南の山奥に住む特殊な文化を持つ者たちが作った貴重なものだそうで、本当に貰ってもよいのかと聞いた所、彼はここで旅を終えるらしく、これから先使う機会もないであろう自分が後生大事にもつより、必要とする者が持っていくべきだと言って譲ってくれたのだった。
その『笛』を懐に仕舞い、野犬が取り巻いていた木の下へ向かう。
そこから上を見上げて一体何がいたのか探すが暗いばかりでよく見えず、見つけることができない。
ひょっとして『笛』の音に怯え犬と同じように逃げてしまったのかと考えていると、額に一滴の雫が落ちてきた。
一瞬雨かとも考えたが月は出ているし、そもそも木の下にいて雨粒が顔にかかる筈もない。手で拭ってよく見てみると、それは血であった。
はっとして見上げると今度は頬に雫が落ちる。目を凝らして樹上をみると、一際大きな陰がそこにあった。
一歩退いて地面をみると、その下は血の飛沫で赤く染められていた。
ふとあの岩場が過ぎったが頭を振って追い払い、幹に手をかけて

登っていく。
太い枝に掴まった所で体を引き上げると、その先に全身を赤く染めた一匹の狼がいた。

こちらをじっと見てはいるが警戒しているようではない。というより、その目に力は無く、見るからに衰弱している。
――まったく、今日は最後まで獣の生き死にによく関わる日だ。
朝、顔を洗いに川まで来たら側に狼の死体が、なんてのは文字通り目覚めが悪い。一つ手当てしてやろう……と思った所で問題に突き当たった。
それにはまずこの狼を地面に下ろさねばならない。が、どうすればよいのか。
どうやって登ったのか不思議な位である。自力で降りるのは期待できないだろう。
抱えて降ろすにしても、子供の狼ならまだしもこいつは立派な大人である。足を滑らせてふたりとも地面に叩き付けられるのが落ちだ。そもそも抱き抱えた際に大人しくしている保証がない。
そうしてしばらく狼と顔を突き合わせたまま頭を捻っていると、一つ方法を思い付いた。確実とは言えないし、こちらの身に危険が及びかねないものではあるが。
しかし他に策が思い付かない以上、それにかけるしかない。意を決して枝を離れ、地面へと降りる。
失敗すれば狼の命が危ういということもあり、上を見ながら慎重に位置を確かめる。
そして懐から先ほど仕舞った『笛』を取り出すと、再び勢いをつけて振り回す。
枝の上の陰が揺れ、擦れ合った葉ががさりと音を立てる。
尚も続けると陰の動きは大きくなり、枝も大きく軋みを上げ始める。
そしてついに、一際大きな音と共に木の上の陰が落下した。

「っ！」

その体を受け止める。手放した『笛』は遠く枯れ草の上に落ちて乾いた音を立てた。

それほどの高さではなかったが、左足の傷に鈍い痛みが走り思わず膝から力が抜けた。

そこで怯えた狼が腕の中で暴れ出したため姿勢を崩し、仰向けに倒れる。

のしかかる形になった狼は前脚でこちらの体を地に押さえ付け、鋭い牙を右肩に突き立てた。

「ぐうっ！」

思わず呻きを上げるが、なんとか両手をあげて狼の体を抱きしめる。それで逆に抵抗は増したが、構わず抱きしめ続けた。

しばらくすると狼も大分落ち着きを取り戻し、腕の中でぐったりと力を失った。

上体を起こし、その体を横に動かす。狼は抵抗せずに大人しく上からどいた。

肩を押さえて家まで戻り、傷薬や包帯、食べ物に水を汲んだ瓶をとってまた狼のもとへ帰る。

傷口を水で流した後、傷薬を塗って包帯を巻いてやる。傷口に触れると尻尾をぴんと伸ばしたが、抗いはしなかった。

一通り済んだ後に今度は自分の肩に取り掛かる。顎に力が入っていなかったのかそれほど深くはないが、大きな痕が残りそうであった。

取り出した干し柿をかじりながら狼の鼻先に雑を置くと、匂いを嗅いだ後に大きく噛み付いた。

「また来る時は頼むから一匹で来てくれよ」

なんとなく口から出た言葉に狼はおんと一つ返事するかのように吠え、それからまた雉の肉に取り掛かる。

その様子に少し笑みを浮かべ、私もまた干し柿を一口かじる。甘い香りが口に広がった。

こうして山の獣たちとの一日は終わりを迎えた。

そして、実はこれが山のあやかしたちとの最初の一日でもあったのだった。

一、けものとかりうど（後書き）

臆病者ゆえに予防線を張っておきますが、作者は理系の人間であり古い日本の風土や文化なんてものについての教養は中学生並です。一応資料をかき集めて書いてはおりますが、この話の中で営まれている生活は日本のそれとは大きく異なります。

１０キロ北の村人はゲルで生活し、２０キロ南の村人の主食はパン。３０キロ東の都の人はジャパニメーションにうつつをぬかし、１００キロ西では火星人と独立戦争の真っ最中です。

要するにフィクションの中の世界であり、『これは夜行性の動物だから昼間は寝てるぞ！』とか『作用反作用って知ってます？　実際そんなことしたら鉈なんて軽くへし折れますよ』などの突っ込みはどうか笑って済ませてくださいませ。

とはいえ、和風と銘打った小説は初めてですので、何かしらの感想や意見等を頂けると嬉しいです。

作者は読者からの言葉を燃料に筆を動かします。それがどんな些細なことでも、無言でいられることに比べれば月とすっぽん、全くもって違います。

この話を読んで何かあれば、気軽に一声おかけ下さい。ほら、目次の一番下に……ね？

二、しまいとふとん

一本牙を倒してから三日が経った。

すぐ次の日に村から宴を開くとの知らせを受けたのだが、疲労と獣の爪牙による傷から体調を崩した事を理由に辞退させてもらった。

今も多少体が軋むような感覚が残るが、一人暮らし故に何もせず寝ている訳にもいかない。

水汲みから薪集め、家屋の補修とやることは山のようにあるのだ。

受け取った食料にはまだ余裕があるが、他に必要なものも多くあるので午後に村へ行くことにした。

雲一つ無い秋晴れの空の下、溜め込んだ三日分の洗濯物や蒲団を干し、ふうと一息つく。完調にはまだ少し時間がかかりそうだ。

棒の先に鉤針の付いた糸を括りつけただけの簡素な釣竿を川に垂らし、のんびりと陽の下で釣りを楽しむ。

村へいく際の手土産にでも、と思って始めたが、これがなかなか掛からない。魚が少ないのかそれとも単に下手なだけなのか、どちらが真実か定かにならぬまま刻々と時間が過ぎる。

林の中からの小鳥の囀りと小川のせせらぎを愉しみながら、何処までも吸い込まれていきそうな青空を茫とした心地で見上げる。

興奮と共に弓と鉈を手に持って草木を掻き分け進むのも良いが、こうして何も考えずにただ静かに過ごす時間も嫌いでは無かった。

子供の頃は非常に大人しい性格で、外に出て兄や父と弓や刀の稽古をするよりは姉妹たちと貝合わせや詩歌を作る方が楽しかったも

のだ。
体が大きくなり始めてからは武家の男子たるもの、から始まる台詞で無理矢理引っ張り出されるようになり、そのような遊びをする機会は無くなったが。
近年は泰平の世が続き、戦の気配もとんと感じられないが、今も兄弟達は馬に跨がりいつ来るか解らぬ『有事』に備えているのだろうか。

「……おっと」

釣竿に手応えを感じて慌てて立ち上がり、竿を立てる。ちゃぽん、と小さな水音を立てて一匹の魚が水面から飛び出した。
ぴちぴちと手中で跳ねる魚から針を外し、傍らの水を張った手桶の中に放す。そよぐ風に濡れた手が僅かに冷えた。

村へ行く際に手にした三匹の川魚は、帰りには大工道具の入った木箱と細々とした日用品、そして酒に換わった。
二日前の宴会の際のものを残していてくれたとのことで、丁重に礼を述べた後に有り難く頂いた。

都にいた頃はまだ成年前で飲むことは無かったし、旅に出てからも呑む機会はあまり無かった。
幾度か同じ旅人や狩人仲間と酒の席を持ったことはあったが、それは酒を呑むことよりむしろ情報交換が主な目的だったので、楽しんで酒を呑んだことはなかった。
酒は神の生み出した命の雫だ、と評する者もいるくらいである。

楽しみ方を知れば素晴らしく魅力的なものなのかもしれないが、一人酒ではそれの知りようも無い。
とりあえず今晩にでも少し試してみるかと思いながら森の中の道を抜け、もはや見慣れたぼろ家へと辿り着く。

と、そこでふと異変に気付いた。

――洗濯物が、無くなっている？

簡単に組み上げた台にかけ、大量の布に通しておいた竿代わりの棒が、今では無造作に地面に転がっている。
風で落ちたなら洗濯物がそこらに散らばっているはずだし、獣がじゃれついたのなら土台だけ無事に残っている筈もない。
となると誰かが盗んだという線が残るが、あれだけの量の布を盗む理由も思い付かない。
土台の傍まで近寄っても、多少朝よりは傾いているかという程度で他に不審な痕跡は残っていない。

「どういう事だ……？」

思わず口に出してから、家の中に置きっぱなしの荷物に考えが及び、僅かに早足になって家へと向かう。

出るときに閉めたはずの玄関の戸は開け放たれていた。
これはまさか、本当に――？　と嫌な考えが頭を過ぎる。それに顔を歪めながら戸をくぐり、荷物を纏めておいた辺りに目をやると、

そこに、洗濯物の山が出来ていた。

「……？」

つまり、誰かが自分が留守の間に家を訪れ、干しっぱなしになっていた洗濯物を取り入れたことになる。

また、三和土から上がる所には覚えの無いとげのついたままの栗や土の付いた茸などが集めて置いてあった。

一体誰がという疑問が浮かんだが、それは土間を上がり居間を見回した所で気付いた。

――蒲団から、二つの小さな頭が飛び出していた。

この辺りではあまり見かけない、黄と茶の髪がべたっと広がっている。

すぅ、すぅ、と規則正しい寝息に合わせて蒲団が僅かに上下するばかりで、他には身じろぎ一つしない。よく眠っているようだ。

「……」

さて、どうするか。

状況からして土間の食べ物やこれらを取り込んでくれたのはこの子たちだろうし、悪さをしにきたわけではないのだろう。

それに、日が落ちるまではまだ時間がある。というわけで。

「……」

起こさないように注意しながら、洗濯物を畳むことにした。

※※※※※※※※※

さて。

洗濯物も一通り整理が済み、他にやることも思い付かない。
障子の張り替えや戸の修理は外す際に大きな音が出るし、弓や鉈もしばらく手入れは必要無い。夕餉の準備にはまだ早いし、薪は先二日分くらい拾い集めてある。

なので、なんとなく眠る二人の傍に寄ってその様子を眺めてみた。

見た限り二人はよく似た女の子で、どうやら姉妹ではないかと思える。
二人は十六の自分より更に二、三は下に思える幼い顔立ちをしており、穏やかに閉じられた瞼からは長い睫毛が伸びている。

化粧もしていないのに肌は白く、唇は瑞々しい赤。二人とも今はかわいらしい、という感じだが、成長すれば美しい、若しくは艶やかな、という言葉が似合う美人に育ちそうだと思った。

黄色い髪を肩先くらいまで伸ばした方の子がきゅう、と唸りもぞもぞと動く。それに反応して、同じくらいの長さの茶色の髪を紐で括った子も、うに、と言って身じろぐ。

横になっていた体がころんと上を向き、次いで茶色の髪の間から覗くその瞼がぱちりと開き、そして自分と目が合った。

しばらくの間、互いに無言。女の子はしばらくぱちぱちと目を瞬かせていたが、そのうちにだんだんと大きく見開かれていく。

「……んと、えと、その、これは」

「おはよう」

「あ、はい、おはようございます」

一呼吸。

「じゃなくて、せんちゃーんっ！　やばいってばー！」

「みぎゃっ！？　なにわらばっ！？」

がばっと急に起き上がり、隣ですぴすぴと寝ていた黄色い子をがくがくと揺する。

「な、なぁにこんちゃん。野犬でも近くに出たのぉ？」

「そうじゃなくてっ！　寝てる間に帰って来ちゃったの！」

「へ？」

ぬぼーっと今にも口からよだれを垂らしそうな表情で虚ろな瞳をさまよわせる。まだ夢心地といった具合である。

と、その瞳がこちらを向いたところでぴたりと動きを止め、しばし硬直。

間。

「……あの、その、なんと言いますかですね」

「おはよう」

「あ、おはようございます」

点、点、点、

「失っ礼しましたぁーー！！」

残像が見えそうな程のもの凄い勢いで土下座された。
茶色い子もびっくりして呆然とその様子を見ているばかりである。
「何してるこん、お前も頭を下げろ！」
こんと呼ばれた子はえ、あ、とうろうろと手を動かしたあと、同じように頭を下げた。
そうなると、落ち着かないのは自分の方である。
「ちょ、ちょっと待て、なんだいきなり」
「人様の家へ勝手に上がり込んだあげくに蒲団まで占有し、尚且つ挨拶もせずに眠りこけて迎えるなど、本当になんとお詫びすればいいか……！」
「いや、お詫びとかは別に構わないから。土下座はやめてくれないか、なんだかこっちが罪悪感を覚えるんだが」
「しかし、このような無礼を働いた以上……」
「いいって。洗濯物を取り入れて、食べ物を持ってきてくれたのは君達だろう？　むしろ君達に礼を言いたいくらいだ。だから頼むから、顔を上げて」
「……分かりました」
そういうとおずおずと顔を上げ、ちょこんと縮こまって正座する。
別にそれほど畏まる必要もないのだが……
「それで、君達は誰？　どうしてまたこんな所に」

「はい。私はせん、隣にいるのは妹のこんといいます」

黄色い髪の子、せんが言うと、隣のこんがぺこりと頭を下げた。

「ここに来た理由ですが、私の家の裏にある栗の木が今年はよく実ったので、それのおすそ分けに参りました」

「じゃあ、村の子なのか。わざわざ森を抜けて大変だっただろう？」

「いえ、それほどでも……」

「せんちゃん、あれだけぐっすり眠っておいて疲れてないなんて説得力無いよ」

「……それを言うならお前もだろう、こんっ！」

「あたーっ！？　なんだよう、ぶつことないじゃんか」

涙目で頭を押さえながら姉に向かってぶーたれるが、せんはそれを無視する。

「まあ、とにかくありがとう。悪かったね、わざわざ気を遣わせてしまって」

「いえ、当然のことですから」

「眠りこけるのも当然かー？　せんちゃんの中では当然なのかー？」

小声でぶつぶつと嫌味を言う妹を一睨みして黙らせ、せんは立ち

上がる。

「では、今日はこの辺りで失礼させていただきます。日が暮れてからでは遅いですし、そちらにも色々と都合がおありでしょうから」

「ん、分かった。道中気をつけてな。冬の獣は気性が荒いから」

そういうと二人は苦笑して、よく分かってます、と言った。

と、二人をそこまで見送ろうと思い、立ち上がろうとしたところで、不意に癒えかけた左足の傷が疼いた。

「――っ！」

思わずがくりと膝を折り、畳に手をつく。

「大丈夫ですかっ！？」

すると、三和土で靴を履いていたせんが急に顔色を変えて駆け寄ってきた。

「ん、ああ、大丈夫。たいしたことないから」

そう言ってもせんは不安そうにこちらを見つめ、泣きそうな顔で言う。

「本当に、本当に大丈夫ですか？　何か後々まで響くような怪我では無いのですか？」

左足に手を添えて、俯きながら――せんが今感じているこの感情はなんだ？　悲哀？　それとも、後悔？
なぜ自分の行動にこのような反応をしたのかは分からないが、とにかく安心させるため、その小さな頭に手を置いてゆっくりと撫でた。

「あ……」

「大丈夫。ほとんど治りかけてるし、あと三日もすれば包帯も取れる。今日だってあの長い村までの道を往復したんだ、何も心配することなんて無いよ」

手の動きに合わせて柔らかく揺れる黄色い髪を見つめながら、優しく頭を撫でる。
しばらくそうしていると、こんが俯いたせんに近づいてそのまま隣に座り、その背をぽんぽんと叩いた。

「せんちゃん」

「……うん」

せんはゆっくりと立ち上がり、ぺこりと無言で一礼すると三和土へと歩いていった。

「それじゃ、また今度お邪魔しますねっ！」

続いてこんが元気よく礼をすると、せんの後に続いて三和土へと向かった。

そして最後に、私が立ち上がった。

左足はもう痛まなかった。

二、しまいとふとん（後書き）

本来この話でやる予定だった内容の半分しか入りませんでしたー。
あははー

笑えよベジータ。

どうも、線路無き暴走列車こと怠惰です。飽くまで自称ですが。
一話を投稿したっきり一月の間放置したわけですが、当然ながらアクセス数の伸びないこと。
連載のくせに第一話のみ、おまけに読了時間２２分ときたらそりゃ誰だって読みませんよね。面白いという保証も無いですし。
というかこの作品、何故かぐだぐだと一話が長くなる傾向があります。内容がそれに従って充実するというのならまだしも、実際は……うむ。
やりたいこと、書きたいことを全て表現した上で短く纏める。いつか手に入れたいスキルの一つですね。

一番欲しいスキルは完全記憶能力だったりしますが。だって最近物忘れが（ｒｙ

三、しまいとてんき

翌日の朝、太陽がまだ昇り切らないうちに小さな姉妹は再びこのあばら屋を訪れた。

今日は何用かと聞けば何か手伝うことでもあればと言うので、いくらか問答をした後でその好意に甘えることにした。

姉のせんには煮炊きに使う竈（かまど）の掃除を、妹のこんには障子の張り替えを頼んでおき、自分は力の要る戸の修繕に取り掛かった。

なにせ慣れない作業であるため終わる頃にはすっかりお天道様も顔を出し、その穏やかな陽光を惜しみなく地に注いでいた。

その頃には二人も与えられた仕事をこなし終え、どこから見つけて来たのか小さな箒と雑巾を持ってせっせと掃除に取り掛かっていた。

取りあえず時間もそれなりなので飯でも作るかと二人に言うと、ならば私が作りましょうとせんは言い、そのまま台所へ向かった。

しかし、流石にそこまでして貰うのは気が引けるので止めようとしたのだがせんは一向に引かず、おまけにそれじゃあたしもー、などと言いながらこんまでやってくる始末。

仕方ないから皆で作ろうということで合意し、狭い台所の中で無駄に慌ただしく料理に取り掛かった。

因みに、せんの包丁捌きはそこそこのものであったがこんの方はかなり危なっかしく、付きっきりで指導してやる必要があった。

「近いうちに雨が降りますね」

棒と板を適当に組み合わせただけの簡素な卓を三人で囲み箸を進めていると、せんがふとそのような事を言い出した。

「そうか……？　まだ暫くは晴れが続きそうだけど」

開かれた戸から覗く空は相変わらずの晴天で、ここ数日の空模様とは何の変わりもないように見える。

「風に僅かに雨の匂いが混じっています。昨日までは感じられませんでしたから、雨雲がこちらに近づいて来ているのではないかと」

するとこんもそれに頷き、同意を口にする。

「多分二、三日くらいじゃないかなー？　まだ雪にはならないと思うけど、雨漏り対策に屋根も修理しておいたほうがいいと思うよー」

「そうか」

雨の匂い、か。山の天候は予測できないとよく言われるが、その麓に暮らす人々にとってはそういうわけでもないのだろうか。

「なら後で村に降りて道具を借りないとな。早いうちから始めないと間に合わなくなる」

「職人の方を呼べば早いと思いますけど……」

「いや、自分の事はなるべく自分でしておきたい。すぐ人に頼る癖は付けたくないから」

旅の中でもそれには気をつけるようにしていた。いつだって最後に頼れるのは己の腕一つなのである。絶対の必要がない他人の手は借りないに越したことはない。

「おにーさんは頑張り者だね。えらいなぁ」

「はは、どうも」

にこにこしながらこんはそんな事を言って、それから煮物を口に運ぶ。一見子供っぽい所が多いこんだが、口に物を含んでの会話を慎んだりとそれなりに作法は守っている。

「ところで貴実さん。一つ聞きたいことがあるのですが……」

と、せんは急に姿勢を改めてそんな事を口にした。視線で促すと、せんは静かに言葉を継ぐ。

「貴実さんは旅の途中との事ですが、ここで暮らすつもりは無いのですか？」

「すまんが、無いな」

質問に間を置く事なく答える。せんはそれに驚いたのか、少し戸惑うような仕草を見せた。

「……何故ですか？　何か不満な点でもあるのでしょうか。田舎が嫌だ、とか」

「いや、そんな事は無い。この地は木々も豊かだし人々も温かい。なかなかいい土地だと思う」

「ならば、どのような理由で？　この村で共に暮らす気は無いのですか？」

「そーだよ、一緒に暮らそうよー」

口の中の煮物をんぐ、と飲み込んでこんもそれに追随する。だが、

「……今の所、どこかに長く腰を据える積もりは無い」

「……理由は教えて頂けないのですね」

「……」

そのまま口を閉ざす。出来れば冬の間でさえ一つの所に留まっていたくはないのだ。それが一生ともなればなおさらである。

「春になって温かくなり、土が乾いて足場がしっかりしてきたら私はここを去るよ。けど、それまでは……」

「……ええ、分かりました」

せんは瞼を閉じ、何か思うように僅かに俯く。

「食事を終えたら屋根の修理に取り掛かりましょう。私に何か手伝える事はありますか？」

村の職人の元で修理の方法やコツを教授してもらい、そして必要な道具を借り受けたその帰り道で村長とばったり出くわした。

「これは雁谷殿。そのような道具を持って何を？」

村長は僅かに延びた白い顎髭をいじりつつ、人当たりの良い笑顔を浮かべながらそう問う。

「いえ、屋根の修復をしようかと思いまして」

「あぁ……あの家も大分古くなっておりますからな。今まで雪の重みで潰れなかったのが不思議な位です」

村長は申し訳なさそうにそう言うと、それから会う度に口にする言葉をまた繰り返す。

「雁谷殿が望むのであれば、あのような森の中のぼろ屋でなく私の家の一室をいつでも用意しますが……」

「いえ、構いません。迷惑をかけるわけにもいきませんし、一人の暮らしに慣れておりますので」

「そうですか……ならば良いのですが」

「しかし、屋根を直すとなるとなかなか厄介そうですね。近いうちに雨が降るようですし、文句も言っていられませんが」

あの小さな姉妹に分かる事なのだから、当然目の前にいる年配の男性にも予測できているだろうと思い軽い口調で話す。しかし

「むぅ……そうですか？　雨の気配などとんと感じませぬが」

「……え？」

「もうしばらくすれば嫌というほど雪が降るようになりますが、まだこの時期は乾燥した日が続きますよ」

「そ、そうですか……では、この辺りで失礼します」

何かあれば遠慮なく、という村長の言葉に頭を下げてから別れる。姉妹の言ったことは単にあてずっぽうだったのだろうか。しかしそれにしては随分と確信を持っているかのような、さも当然であるかのような語り口であったが……。

そんな事を考えながら、今頃は姉妹が針と糸で破れた衣服と格闘しているであろう家へと向かう道を行く。

そして、その二日後。

雨が降った。

四、あまぞらとたびびと

普段ならそろそろ日も沈み月が天に輝き始める時間帯であろうか。朝から降り続いている雨は未だにその勢いを衰えさせる事も無く、時折思い出したように吹く突風と共に雨戸を叩き軋ませる。

それなりに時間を掛けて補修したものの所詮は素人の手に因るもの。板敷きの床の上に並べられた五六ほどの器が天井から滴る雫を点々と受け止めている。

朝からもう何度目になるか、溜まった雨水を三和土に捨てつつ、これでもやらなかったよりは幾分ましなのだろうと思って心を慰める。

流石にこの雨の中を突っ切ってくる訳にはいかないのだろう。ここ数日欠かさず顔を出していた姉妹も今日は現れず、久し振りに一人きりで無言の一日を過ごした。

一年以上寄り添ってきた孤独を相手に、心の隅で僅かに感じているどこか物足りないという思い。それは自分が弱くなったことを意味しているのか。

「……」

火鉢に満たされた灰の上、赤くぼんやりと照り輝く黒炭が音を立てて小さく弾ける。

自分は、人に寄り添うことが叶わないと知りながら、それでも繋がりを絶つことが出来ずに遠くから未練がましく眺めている矮小な存在であるとは自覚している。いや、そう言い聞かせているというべきか。

だが今、その心底から願って止まない他人の温もりが掌中にある。それが逆に自分の中にある癒えない寂しさを強く思い出させるのだ

ろう。

「……はぁ」

これまた今日何度目になるかという溜め息を吐き、それから油を燃やしている燭台と床に積まれた本の山を手繰り寄せる。

先日家を掃除していた際にせんが押し入れの奥から見つけ出したものであり、古今東西の様々な物語を集めた古書のようであった。

以前この家に住んでいた者が所有していたのだろうが、都周辺ならともかくこのような辺境の村の、更に外れた場所に住む読み書きを習得した人物とは一体どのような偏屈した精神の持ち主だったのだろうか。

一際厚い和紙で作られた表紙を摘んで開けば、乾いた音と僅かな埃を立ててその中身をさらけ出す。

表紙はすっかり色褪せて劣化も激しいが、その内側は奇跡的に良好な状態を保っており一字一字しっかりと読み取れる程であった。

今は昔、西国の美しき異貌の都にとある若侍あり――そんな定型文から始まる物語にしばし時を忘れ、隙間風にゆらゆらと揺れる火の明かりを頼りに頁をめくる。

ぱらぱらと屋根を叩く雨の音に紙の擦れる音を混ぜながら、そういえば屋敷を出て以来読書もしていなかったなと思い出す。

とはいえ武家の生まれということで、読む物といえば小説や随筆など読んで楽しい類の物では無く、大概が武芸や兵法に関する実用書ばかりであったのだが。

それでもちょっとした悪戯として姉や妹から借りた恋物語などをそれらの中にこっそり潜ませ、父の目の前で剣術の指導書とうそぶきながら愛し恋しの世界に意識を飛ばしたりしたものだ。

その後には当然ながらその所業がばれ、三人掛かりでみっちりとしごかれたわけだが、とにかくあの頃は進んで馬鹿な真似ばかりしていたものである。

物語も終盤に差し掛かった頃、ふと耳に石を蹴り上げるような忙しい足音が届いた。
規則的な足音は少しずつ近付く。それが軒下の辺りまで来ると今度はがたんと壁に寄り掛かったらしい音を立て、それから一つ大きく息を吐いた。
何者だろうかと一人沈黙して様子を伺っていると、足音は家の戸の方へと向かい……声を掛ける事もなくがらりと開いた。

「……」

「あ」

手元の燭台に乗せられた皿の上で頼りなく燃える油だけしか光源のない室内は薄暗く、故に現れた人物の姿はよく見えなかった。
だが発せられた声の響きから若い女性であるということは分かった。更にそこに含まれた驚きの色からここに人が住んでいないと思っていたであろうことが推測され、それから村の者ではないのだろうという結論が出された。

「旅人か？　雨宿りはかまわんが、戸を開ける前に確認くらいしてくれ」

「う、いや悪い。明かりも点いてなかったし、空き家か何かかと」
ぼんやりとした影は片手を上げて頬を掻くようにしている。まあ外見も古ぼけているし、荷も外にあまり出してないから仕方ないか

もしれない。

「で、どうする。近くの村まで行くのなら道案内くらいするが」

「いや、この辺りは立ち寄っただけで村には特に用事はないし、風雨さえしのげれば……っくし！」

「……取り敢えず中に入れ。着替えと茶くらいは用意できるぞ」

「うぁー……では、お言葉に甘えて」

鼻をぐしぐしとさせながら女は履物を脱ぎ居間へと上がる。それにつれ、その姿が段々と闇の中から浮かび上がってきた。

雨に濡れてべったりと張り付いた短髪は黒みがかった灰色で、すらりとした輪郭と気の強そうな目付きには野性的な力強さがある。また、左目の下、耳から鼻の根元にかけて一本の大きな傷が走っている。

身に纏う服は普段生活の中で着る色合いや見た目にこだわったものではなく、体の動きを阻害しない事に重点を置いて縫製された旅装の類であった。

炭を足した火鉢を渡してからその場を離れ、着れそうな服と拭巾を手に取って居間に戻る。

「男物で悪いが、見てる奴もいないし我慢してくれ」

「ホントに悪いな。しかしまあ、こんな時期に雨とはねぇ……雪でないだけましかもしれないけどさ」

隣の部屋に移って障子を閉めると、そのむこうからしゅるしゅると帯を解く音が響いた。

「それで、一体どうしてこんな所に来たんだ？　暗くて道を外れるにしたって、林の中を歩いていれば気付くだろ」

「いやまあそれがな……何人かの仲間とつるんで旅をしてたんだけどさ、その途中今朝からの雨で足止め喰らっちゃって。近くに旅籠もないしこれからどうするー、とか道の上で相談してたら野犬の群れに襲われてさ。それから逃げ回ってたらいつの間にか荷物は無くなるし仲間とは散り散りになるし何故か森の中にいるしで」

「……そりゃまた運が無いな」

そう言うと女は苦笑いを浮かべ、まあねと呟いた。

「でもま、今もこうやってちゃんと命はあるし安全な場所も見付けられたし、なんとかなるもんだよ……っと、もう大丈夫だ」

障子を開けて居間に戻ると、女は頭に拭巾を乗せたまま火鉢に手を翳していた。毛布も出しておくか。

「明日になれば雨も止むだろうし、一先ず今日のところは泊まっていくといい。私の名は貴実。狩りをしながら各地を旅しているが、今は村の世話になっている」

「あたしはりつ。あたしも世間で言うところの旅人だね。南から北上してきたとこ。とりあえず、一晩よろしく」

軽い挨拶の後、私は予備の毛布を出すために押し入れへと歩きだした。

それからは特にすることもなかったので、少し早い時間ではあったが夕餉の支度をすることにした。
旅中で身につけた料理などたかがしれたものだがそれはそれ、同じ卓を囲む者がいるというのはそれだけで食事を何倍も旨く、楽しいものにしてくれるものだ。
また、りつは話すのも聞くのも上手く、こちらの話には一々頷いたり相槌を打って場を盛り上げ、自分が話すときは大袈裟な身振りや表現を交えてこちらを楽しませた。
食後には仕舞っておいた酒を取り出して盃を酌み交わし、それぞれの旅の話で盛り上がった。

「それでそいつときたら、俺は熊だって素手で殴り殺せるが猫だけはどうしても駄目なんだ！　とか叫ん、で……ふぁあ……」

「ん、眠いのか？」

「あー、先の見えない雨ん中必死で走り回ってたからなぁ。今日は少し疲れたかも」

りつはごしごしと眼を擦り、それからまた一つ大きな欠伸をする。
傍の燭台を覗き込めば、なみなみと満たしておいた油がすっかりと干上がっていた。思ったより長いこと話し込んでいたようであった。

「そろそろ布団でも敷くか。私はむこう、りつはこっちの部屋でいいか？」

「ん？　別にいいよ、そんなめんどいことしなくても。一緒の部屋でいいって」

「そういう訳にもいかないだろう」

「障子一枚隔てたところで何が変わるわけでもないでしょ。それともまさか、下心でもあんの？」

「……分かったよ。一緒でいいんだな」

仕方なく卓を片付けた居間の中央に少し離して二組の布団を敷いたところ、不満げな表情をしたりつが片方を引きずってくっつけようとしたのだが、流石にそれは阻止した。

「頼む、頼むからそれは勘弁してくれ。夫婦（めおと）でもあるまいし」

「むぅ……ま、いいや。許してあげよう」

そう言うとりつは片方の布団に潜り込み、さむさむっと一人呟きながら丸くなった。……顔に出ていないが結構酔っ払っているのだろうか。

もぞもぞとうごめく布団を眺めながら、自分も布団の中へ潜り込む。冷えた空気を一杯に吸いこんだ布団のひんやりとした感触が火照った体に心地良い。

「なぁ、貴実」

燭台に蓋を落として火を消すと、隣から静かな声が上がった。

「しばらく此処で暮らしてもいいか？」

「……それは、どうしてだ？」

「……最近、ちょっと思うところがあって、旅に疲れてさ。もうすぐ冬になるし、雪が降れば身動きも取れなくなるだろ。その間に色々考えたくって」

酔いか、それとも眠気が原因か、ぼうっとした口調でりつは語る。

「村や街だと、人付き合いとかでせわしないからさ。静かに考えたいっていうか。その、えーと……」

「旅の理由？」

「そう、そんなのをさ。あたしももう子供じゃないし、自由気ままにフラフラしてるのもいい加減……限界なのかな、って。……それで、あたしらしさっていうのかな、それはどんなものなんだろうって……」

「自分らしさ、ね。――まあ好きにするといい。私もこの家は貸してもらってるだけだし、ある程度家事とかで貢献してもらえればいくらでもいてくれて構わない」

「……そう。……わるい、な……たかさね……」

「ま、取り敢えず今は寝ておけ。明日また話をすればいいさ」

聞こえたか聞こえなかったか、りつの布団からはすぅすぅと規則正しい寝息が聞こえてきた。大分疲れが溜まっていたのだろう。

気付けば雨もすっかり止んだようで、漏れた雨水が器を叩く音も

すっかり鳴りを潜めている。

「……そういえば、最後に水を捨てたのはどのくらい前だったか……」

溢れてたら面倒だな、なんてことを考えながら、私の意識はゆっくりと闇の底へと沈んでいった。

四、あまぞらとたびびと（後書き）

世界で最も多くの人を溺れさせたのはポセイドン（海の神）ではなくバッカス（酒の神）である。
そんな言葉もありますが、私としては酒盛りより水泳で体を動かす方が好き……どうでもいいですね、はい。

作中の人物、つか貴実は十六という設定ですが、この世界では十五で成人と見做されますし、そもそも酒を飲むのに年齢制限などありません。子供から老人までがっぱがっぱ飲んで吸って打って打ってます。最後のは嘘です、すみません。
とはいえ私達の暮らす現実世界ではお酒は二十歳になってから。未成年の飲酒喫煙はやめましょう。

……祖母いわく『酒と煙草は二十歳で止めるもの』らしいですがね。
なんという不良……！

五、さむぞらとまれびと

温い水にどっぷりと浸かったようなけだるい気分の中、小さな足音が耳に届くのを何とは無しに聞いていた。
しゃり、しゃり、と砂利を蹴る音は規則正しく、ゆったりとした調子で続けられる。
未だ半分夢の中に沈んでいた意識は、その足音の接近と修理したての戸を叩く控え目な響きで、はっ、と覚醒した。

「――もし。雁谷殿、起きておいででしょうか」

小さく、されど厚い戸を挟んでのものとは思えぬほどにはっきりと届いたその声は聞き覚えのない女性のもの。
上体を起こし、霞む眼を擦って周りを見回せば、固く閉ざされた雨戸の隙間から一筋の光がうっすらと差し込んでいる。日の出からまだ間もない頃であろう。
少し離れたところに敷かれたもう一組の布団には、りつが起きる気配も見せずに静かな寝息をたてている。

「少し待ってくれ。寝起きで何の支度も出来ていない」

眠るりつを起こさぬよう小さな声でそう答え、見苦しくない程度に身を整える。
服を変え、口を漱ぎ、跳ねた髪を手櫛で押さえ――都で武士としての暮らしをしていた頃ならまず父上殿の叱りは免れぬような乱雑なものではあるが、一先ず体裁は整った。

「済まない。待たせたな」

草履を履いて戸の外に出ると、そこには首から上を頭巾ですっぽりと覆い隠し、鮮やかな朱で彩られた着物を身につけた女がいた。
女は自らの爪先を見つめるかのように俯いており、目元から上のあたりを窺い知ることはできない。

「して、このような朝早くから何用だ？」

「……用件については長い話になります故、そこらを歩きながらでも宜しいですか？」

来訪の理由を問うと、女はちらりと戸の内を伺うようなそぶりを見せてからそう提案した。

「……そうだな。立ち話では肌も冷える。そうするとしよう」

この時期のこの時間、立ち話をするには空気が冷たいし、かといって屋内には就寝中のりつがいる。昨日の雨の中を延々と走り回っていたのなら疲れも溜まっているだろう、話し声で起こしてしまっては気の毒である。
二、三歩後ろを着いてくる女の気配を感じつつ、村へと続いている林道をゆったりとした歩調で進む。
亀の如き歩みの理由には寝起きで身体が重いというのもあるが、それよりも昨日の雨でぬかるんだ地面によるところが大きい。
足を踏み出すごとに聞こえてくるぬちゃぬちゃという粘着質な音と、草履越しにも伝わる柔らかな感触が、これ以上速く歩くことを躊躇させる。

「……さて。そろそろ話して貰ってもいいだろうか」

背にした住家が木々に遮られて見えなくなる程の時を挟んでようやく本題に入る。道の所々に残された茶色の水溜まりを避けた。
女はええ、という短い返事をして、神妙な面持ちで口を開いた。
「しかし、その前に――雁谷殿はこの村、ひいては一帯の山々についての歴史をご存知ですか？」
「いや、知らないが……それは今回の話と関係があるのか？」
「はい、とても深い関わりが。ではまず、その辺りから話を始めさせていただきます」
ふっ、と一陣の風が吹き、朝の冷気に晒された身体がぶるりと震える。
女はこちらに合わせたゆったりとした歩みでつかず離れずの距離を保ちながら、滔々と話し始めた。

＊＊

まだ人の姿はなく、鬱蒼とした薄暗がりの満ちる森と様々な獣たちがこの地を支配していた頃。いえ、今でもこの地は人が支配しているとは到底言えたものではありませんが、とにかく遥か昔のこと

です。
ここから二つ先の山で、新たに鉱脈が発見されたとのことで、大勢の人がやってきました。
やってきた人々はまず開けた場所を探し出して木々を払い、岩を取り除いて地を均し、そこに拠点となる小さな村を作り出しました。
それから鉱石を掘り出すために次々と地を掘り返し、また精製のために昼夜を問わず火を焚き続けました。
その地に眠っていた鉱石は本当に質が高く、その噂を聞き付けた商人や労働者たちが次々と集まって村は自然と大きくなり、採掘の規模もまた拡大されていきました。
しかし、村が出来てから数年の後、村の活気も最高潮に至ろうかというころにある者たちがそこを訪れました。
彼等はたった三人ばかり、外見も何の変哲もないように思われましたが、しかし村に訪れる他のものたちとはどこか違った空気を纏っていました。
人々の奇異の目を意に介すこともせず、彼等は真っ直ぐ鉱山の一切を取り仕切る者の元へと向かいました。
村長を兼任するその男は突如自分の支配する土地を訪れた身分の分からない者達のことをどうせ面倒事でも運んできたのだろうと考え、部下たちに命じて門前で追い払おうとしました。
しかし、三人はそれを無視して建物の中まで押し入ると、静かな怒りの篭った口調で言い放ちました。

『お前達の身勝手な振る舞いにより山は弱っている。森の木々は次々と切り倒され、川の水には鉱毒が混じり、絶えず立ち上る煙に空は澱んでいる。
私達は人間を特に拒むつもりはない。今まで特に何らかの手を出してこなかったのがその証拠だ。だが、お前達は共に住む為に私達が許容できる範疇を大きく逸脱した。
故に、私達は自身の生活を守るため、この村に選択を迫ることと

する。
一つは、山を苦しめる行為を今すぐに止めることで、私達との共存を再度目指す道。
一つは、私達の要求を蹴り、山にもたらした害の責任を、その身をもって取る道。
どちらを選ぼうとお前達の勝手だが、その選択には多くの命が関わるということを覚えておけ』

三人は一方的にそう言い放つと男の返事を待たずに建物を出て、そのまま村を後にしたそうです。
村長はしばし訳も分からず呆然としましたが、結局は素性も知れぬ者達の言葉、何ら気にすることはないと結論を下してこれまでと変わらぬ生活を続けました。

それから、ほんの十日程の後。
あれほど活気のあった村は、もはや廃村の如き様相を晒していました。
村の中心を走る大通りに人の姿は無く、立ち並ぶ家屋からは苦しげなうめき声が絶えず漏れ聞こえてきました。
鉱夫のみならず、何らかの形で鉱山に関わってきた者達が次々と体調を崩し始めたのです。
その事態を見て村長は酷く焦りました。今までも体調を崩した者は少なからずいましたが、このような短期間で大勢が倒れたのは初めてだったのです。
村長は以前訪れた三人の言葉をふと思い出しましたが、その頃はまだそんなはずはないと考えていました。
しかし、更に二十、三十と日を過ごすうちに、村長はあの者達の語った話は真実であったと思い知らされることとなりました。
新しく鉱夫を雇っても三日と持たずに体を壊し、木々を倒したきこりは熱に倒れ、村の商品を仕入れた商人は近い内に必ず体に不調

が出ました。
被害は収まるばかりか更に拡がり、ついには村を訪れるだけで何らかの災いが訪れるまでになりました。
呪われた村として悪い噂も広まり、村の加工品の商品価値も大幅に下がってしまい運営はどうしようもなくなり、村長は鉱山の閉鎖を決定し、更には村も放棄することとなりました。
荷を纏めて村を離れようとした時、ふと村長が振り返ると、そこには三匹の獣の姿がありました。
山犬に白兎に、巨大な猪――奇妙な取り合わせでしたが、それらは微動だにせず村を去る人々の列を見詰めていたそうです。

＊＊

「――そして、今から五十年ほど昔、人は例の鉱山から僅かに離れたこの山に再び集まり、新たに集落を作ったのです」
女は変わらず静かな調子でそう語り続ける。
「新たにやってきた人々はこの話を心得ており、故に山を害する行為は出来得る限り慎みました。
木々の伐採は必要な分に限り、無益な殺生は避け、山との調和を乱さぬよう穏やかな生活を心掛けました。
全ては山の災いを恐れたが故、ひいては――」
女はそこで一旦言葉を止め、そして――

「山の主を、その超常なる力を、畏れたが故に」

「――――っ！？」

ぞくり、と、背中に冷たいものが走った。
振り返ると、女はやや俯いたまま足を止めている。相変わらずその顔を窺うことはできないが、その小さな姿からは強い圧迫感が発せられていた。

「……分かりますか？　この山の平穏は主の名に依って成り立っているのです。主は絶対の力の象徴として、手を出すことの能わぬ存在でなくてはならないのです」

意識せずに喉が鳴る。何故、この女はそのような事を言い出したのだろうか。
穏やかに抜ける風に、ざわ、と擦れた枝葉が音を立てる。

「……それが、私と何の関係があるんだ？」

「逆に聞きますが、今の話が本当に自分と関係のないことだと思っているのですか？」

「何を」

言っている、と続けるよりも先に

「主になると宣言し、」

言葉、と

「我らが主を、いや、」

拳、と

「――我が父を殺した貴様が、関係ないとでも？」

――殺意、が。

音もなく、突如として襲い掛かってきた。

「っ、な――！」

女は歩いて数歩の距離を一瞬にして詰め、そのままの勢いで振りかぶった拳を目の前で繰り出そうとしている。

なんの小細工もない一直線な攻撃。これでも一応武家に生まれ、一通りの格闘術を修めた身である。不意を突かれたとはいえ、普段ならいくらでも対応ができたはずであった。

しかし、雨上がりのぬかるんだ足場と、それを無視するかのような女の想像を絶する加速によりまず回避が封じられた。

次に女の拳の狙いが体の中心である鳩尾であったために受け流すことも出来なくなり、残された対処法は受け止めるのみとなった。

咄嗟に腕を交差させ、重心を落として体を安定させる。とはいえ所詮は女の細腕、たいしたことはないだろうと高をくくっていたのだが、次の瞬間。

「〜〜〜〜っ！？」

交差した腕の骨がみしり、と軋んだ音を上げ、上体が大きく後方へと押し込まれていた。

「がっ！」

思わずそのままの勢いでたたらを踏んで後退し、硬い木に背をたたき付けたところでようやく踏み止まる。

「ほう、今のを受け切ったか。多少は骨があるようだな」

追撃を警戒したが、女は振り切った拳を元に戻すと、そのまま自然体で立っていた。……ただし、その顔にはこちらに対する強烈な敵意が張り付いていたが。

「お、前……あやかしの類か？」

「そうでなくて何になる。人間の女子（おなご）は皆このような拳を振るえる

のか？」

だとしたら恐ろしいことだ、と言ってくつくつと笑う女を前に、自分はただ疑問を口にすることしか出来ない。

「何が目的でここまで来た。……私を、殺すのか？」

「いや、殺しはしない。『今は』……な。そう怯えるでない、先ほどのは挑戦状代わりだ」

「挑戦状、だと？」

それこそ一体何の話だ、と言おうとしたが、女の視線に気付き息を飲んだ。そしてその隙に女が話し出す。

「私は貴様を主だとは認めない。人間であるということはまだしも、貴様は我が父を卑怯な罠に嵌めて弱らせた上で殺したに過ぎない。そんなことで貴様の強さを認めてなるものか。

故に――父の代わりに、私が貴様の力を改めて確かめてやる。五日後の夜、月が昇りきる時にあの一枚岩で待つ。その日には山の重鎮たちも集まる、戦うにせよ逃げるにせよ、必ず顔を出せ。それが、父を殺し、あのような愚かな宣言をした貴様の義務だと思え」

それだけ言うと、女は踵を返して森の中へと消えていった。聞きたいことは他にも色々とあったのに、止める暇もなかった。

「――あぁ」

木に背中を預けてずるずると座り込むと、様々なことに今更気付いた。

山裾の村の娘があのような華美な着物を持っているはずもなければ、汚れ一つない無垢な手をしているはずもない。
そしてなにより、村からこのぼろ屋への唯一の道に足跡一つ残っていないというのは、あからさまに異常なことだった。

「五日後、か。――満月の二日前になるな」

拳を受け止めた腕には未だに鈍い痛みが残り、背中一面に熱が広がっている。
人外の者との、真っ向勝負。それはそれで考えてみると恐ろしいことに間違いなく、考え無しに受け止めるわけにはいかないような事だったのだけれど。
その日は晴れか、それとも曇りだろうか――なんてことを、その時はただぼんやりと考えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6442c/

あやかしとかりうど

2010年10月10日05時24分発行